



婦人と博物館 吉野智雄

昭和60年代は新しい教育要求の時代ともいわれている。与えられる教育ではなく、自からの意志で自からを豊かにするための教育要求であるところに、これまでの教育要求とは、本質的に異った意味を見出すのである。

この事態に呼応するかのように、先程行なわれた産業構造審議会の余暇部会の答申によると、昭和60年代における博物館の予想利用回数は、現在の9.1倍に増加する、という見込み数をだしているが、それは新しい教育要求に主体的に応えうる教育機能をもつ博物館に、大きな期待を寄せているからである。

県立博物館も、これらの新しい教育要求を先見的に予如して設置された社会教育機関であるが、開館以来からの観覧者の動向を分析すると、まだ博物館特有の教育機能を理解した利用の仕方をしていない人々は、極めて少ないようである。

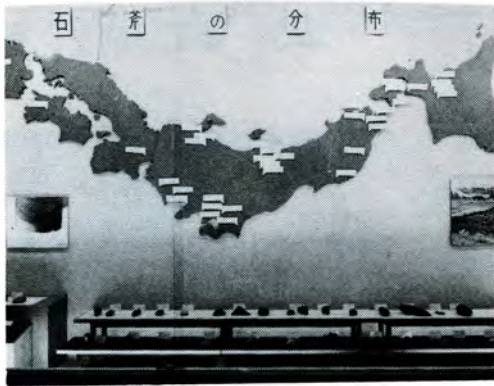
これからの社会に生きる人々は、目的的に社会的な教育機関を高度に利用する技能を、主体的に身につけておくことが不可欠の条件になる。とりわけ、子どもの教育に直接的に携わっている母親には、新しい教育要求に自からが対処する方法を体得するとともに、それらを子どもに伝えておくことが強く要請されてくるようになる。

それには、まず、母親があらゆる機会を把えて博物館を訪れることである。そこでは、博物館が展示物を通して「心の教育」をする絶好の場所であり、親と子が「心のふるさと」としての展示物を媒体として、和やかに対話のできる場所であることを知ることができよう。ここで体得した「自己を精華させる自学の道」を、母親の遺産として子どもに伝え、教おておくことが、子どもの幸せに直接つらなって行くのではなかろうか。

特別展

日本の石斧展

—— みどころ ——



特別展「日本の石斧展」が10月15日より、当館特別展示室で11月24日(日)迄開催しております。

石斧は日本の先史時代において、石鏃と共に代表的な生活用具の1つであり、使用目的によって打製石斧・磨製石斧の2系統があります。又変わったところでは、クジラの骨・イノシシの牙を利用した骨斧・牙斧などもあります。

日本各地の石斧類を一堂に展示したのは今度が日本で初めてであり、北海道・本州そして九州など本県出土の資料と比較するのも面白いものです。石斧の作り方、使い方、又石器の原材料と実物資料を用いてその機能等わかり易く展示してあります。

催し物

第4回 山形県のおしば展

—— 薬草を中心として ——



この催しのように県下の植物相を一堂で概観できるのは、この「おしば展」をおいて外に見られないので、山形県の植物相を知る絶好の機会ですからぜひ必見し、山形県の植物について、より深くより広い知見をえてもらいたいものです。

この「おしば展」には、県内産の薬草や外国産の薬草のなかから、特に利用度の高い薬草及び家庭では使っていない薬草などをとりあげて展示します。薬草の効用は、長い間の経験によってえられた知識の集約ですから、正しい利用の方法を知っておくことは、生活を営んでいくうえにも必要な知識です。

昭和49年12月1日～昭和50年1月26日

この催しは、県下の小・中学校・高校・大学などのクラブ及び一般の植物愛好者の協力をえて開催される。これまでの「おしば展」には、山形県の植物分布や分類おらみて、新たに追加・訂正をすべき新発見や新産地の確認などを裏付ける貴重な出品が数多くあり、山形県の植物相の精査に大きな貢献をしてきたと高く評価されています。

また、この「おしば展」は、県下の植物愛好者が相互に研究情報を交換する場として、山形県の自然史研究の発展のために果たした役割は計り知れないものがあります。

本年度の「おしば展」は、県下の植物相を日夜真摯に追求してきた植物愛好者の研究成果が、数多く出品される予定で、過去3回の「おしば展」を上まわる内容の多い催しになることが予想されます。



県内産・外国産の代表的な薬草について、その採取時期、生えている場所、主な特徴、薬用部、医治効用などについて解説し、正しい利用の方法と薬草の種類がわかるように展示します。

ぜひご観覧くださいようご案内申し上げます。

小論

誕生石

菅井 敬一郎

人類と鉱物との関係は、今から30数万年も前の北京原人が住んでいた北京郊外の洞窟から石器と考えられる石片がみつかって、その関係が知られていた。それから後、ネアンデルタール人・クロマニヨン人をへて現代人の祖先へと進化するにしたがって、人類の知能も発達し、石器も精巧になり、彫刻をほどこした装身具も発掘されてきた⁽¹⁾

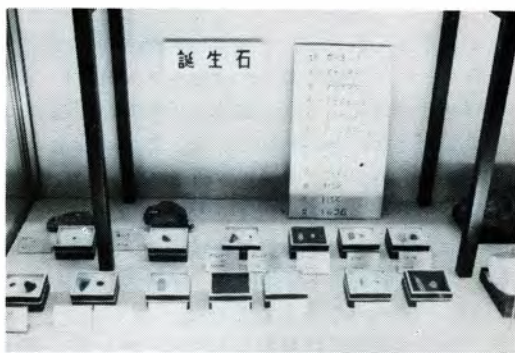
また、特殊な鉱物である宝石を古くから愛好していたことは、聖書や神話などに書かれており、発掘品の中に発見されている。このように、鉱物・岩石は、古くから命をつなぐ石器や装身具に使われていたことがうかがい知れる。

エジプト文化時代に入ると、宝石は貴重な宝とされるようになり、ギリシャ・ローマ時代には、王冠や剣あるいは服飾品に使用して威厳を表徴するにいたった。⁽²⁾

古代人は、天然の美しい宝石を神秘的なものと考え、それを信仰や希望をかなえるために用いるようになった。また、宝石を持っているとその神秘力が身を護ってくれるという信仰が次第になって、今日の誕生石を持つ習慣になった。⁽³⁾

誕生石

誕生石の起源については、諸説がある。⁽²⁾それは、聖書に由来し、ユダヤ教の最初の祭司長が祭



服の胸当てに用いていた12の宝石がもとであるという説、また、イスラエルの12の部族を示すとか、12の門の石垣を築いた基礎石の宝石から…などの説がある。

今日の誕生石の決め方は、国によってそれぞれちがっているといわれるが、一般に次にあげたような鉱物が選ばれている。

以上のほか、わが国では、サンゴ(3月)、ヒスイ(5月)などを加えている。誕生石に決めている鉱物は、宝石(あるいは貴石)が多いので、

誕生石 (天然宝石)

1月	ガーネット
2月	アメジスト
3月	アクアマリン、ブラッドストーン
4月	ダイヤモンド
5月	エメラルド
6月	ムーンストーン、アレキサンドライト
7月	ルビー
8月	オニックス、ペリドット
9月	サファイア
10月	オパール、トルマリン
11月	トパーズ
12月	トルコ石、ジルコン

宝石についてしらべてみよう。

宝 石

宝石 Gemとは、どんなものか? 桜井欽一氏による宝石の定義は⁽⁴⁾

- ① 色、光沢が美しいこと
- ② その美しさが永久に保たれるような性質をもつこと
- ③ 産出がまれで入手が困難であること等が必須の条件に考えられている。

②については、②硬度が高く、7度を超え、かつ脆くないこと(硬度は、ドイツのモース博士がかたさの標準段階として10種の鉱物を決めた。すなわち、硬度の順に1)カッ石、2)石コウ、3)方解石、4)ホタル石、5)リン灰石、6)正長石、7)水晶、8)黄玉、9)綱玉、10)ダイヤモンドである。これをモースの硬度計という) ⑤風化、分解することなく、また、酸やアルカリに侵されないこと、⑥熱に対して強いこと、⑦みだりに変色しないこと等があげられている。

最後に、天然の鉱物は実に美しい。また身近かにみられる水晶をみてもその形や大きさがそれぞれ異なっている。冷たく固く感じる鉱物であるが注意深く観察して、その性質をしらべていただきたいものである。

文 献

- (1)益富寿之助：鉱物(保育社)(1974) (2)菅原通済：宝石天国ニッポン(東洋経済新報社)(1963)
(3)地質調査所鉱床部：宝石(地質ニュース)53(4)桜井欽一：曇石庵塵語(1972)

資料紹介

地学資料

飾石

天然に産する鉱物のうちで、簡単に言えば、特に美しく、質がかたく、産出量が少ないという条件をそなえ、装飾用に使われるものを宝石とよんでいる。宝石類は、貴石、半貴石に分けられ、これより程度が劣り、価格の低いものを飾石として扱っている。本館で展示している飾石は、次のような鉱物である。

- ジャスパー（へき玉）………温海町菅野代産
おもに酸化鉄をふくむギョクズイの一種である。
白いメノウの細脈が入っている。
- 球かりゅうモン岩………小国町杉沢産
小さな球体・だ円体で、珪酸塩鉱物やチョウ石などの鉱物が入っているリュウモン岩。
- メノウ（アゲート）………ブラジル産
ギョクズイの一種で、色模様のあるものをいう。
その色は、変化に富む。火山岩の晶洞を充てんして産出する。
- ヒスイキ石………新潟県青梅町産
ヒスイとよばれている石の中には、硬玉と軟玉の鉱物がふくんでいる。ち密で深緑色のものを



硬玉あるいはヒスイとよんでいる。展示品はキ石の一種で、淡緑色のヒスイキ石である。

- クジャク石………コンゴ産
緑色の美しい鉱物で、表面はぶどう状、房状などを示す。銅の鉱石鉱物である。
- ローズクォーツ（紅セキエイ）………ブラジル産
ピンク色のセキエイ（水晶）である。美しいので飾石に用いるが、主として彫刻に使われる。これらの他、美しいソーダライトやアマゾンストーンなどを展示している。

動物資料

ホンドタヌキ



タヌキは昔から人間とのかかわりあいが深く、民話や伝説にも多く登場し、日本ではよく知られた代表的な野生動物である。また、タヌキの毛皮は古くから利用されており、特にタヌキの毛で作った毛筆は最上級とされているし、毛皮の方も県内ではソデナン、エリマキなどが手づくりで作られる場合も多い。毛皮の状態は全身から脂肪が少なくなってきたり、2月頃のものが最もよいとされている。

アナグマと似ているため呼名に混乱が生ずると

きがあるが、山形県内では、ムジナと呼ぶときはタヌキを指し、マミ・ササグマの場合はアナグマにあたるのが普通である。またタヌキ汁というのはアナグマ汁のことで、ほんとうのタヌキは、くさくて食えないといわれている。アナグマはイタチ科であるが、タヌキはイヌ科であり両者は同じ仲間ではない。タヌキはイヌ科動物の発達した特徴である走るということなどはあまり得意でなく、形態的・生態的にも原始的なイヌ科動物であるといわれ、木のぼりも上手である。

タヌキの生活場所は平地から山地一般に広い範囲にわたっているが、高山帯ではあまり見かけないのが普通である。人里近くに多くすみ、夜行性で昼は穴・樹洞・人家・神社などの床下などにひそんでいる。食性は雑食でネズミ・カエル・昆虫・魚・鳥類・果実・穀類・人間の残飯などなんでも食べるたくましさがあり、人間に追われて姿の見られなくなってゆく野生動物の中で、タヌキは依然として少数ではあるが人間と一語に生きている。狩猟獣であり、県内では最近でも年間6～700頭ほどとらえられている。

植物資料

薬用植物

野外に出てみると、そこには必ずといってもよい程、昔から私たちの祖先が利用してきた薬草を発見することができる。とくに、ゲンノシヨウコは、古くから良く知られている薬草である。その和名や方名の由来は、「現ノ証拠」という意味で飲むとすぐに効果が現われる、ということから付けられたものである。その他にも、イシャイラズ（医者不要）、イシャダオン（医者倒し）、イシャナカセ（医者泣かせ）といった方名がある。このように和名や方名から判じても、いかに効用が高いかがわかる。

本県内では、日のよく当る原野・土手・道ばたなどのいたるところに自生している。日当りの良い庭先・畑の片隅などに植えておけば、よく繁殖する植物である。薬用部は、全草または地上部で、土用の丑の日の前後に採取し、土を落とし、洗って日干しにする。それを荒く刻み、和紙の袋に入れ、風通しのよい、日の当らぬ所につるしておくようにする。腹をこわした時の下痢止め、痛み止めに効用がある。

この他にも薬効の高いオオバコ、ドクダミ、アカネなどが身近に見られるし、郊外に出ればアケビ、センブリ、リンドウ、キキョウなども普通に採取することもできる。



このように天然資源に恵まれている山形県に住む私たちは、もっと自然の恩恵を日常生活の中に取り入れる工夫が必要なことである。小さな庭園に洋種の花物（チューリップ・ダリア）を植え込み、四季折々の美しさを鑑賞することも意味の多いことであるが、そのほんの片隅に、観賞用草花に優るとも決して劣らないリンドウ、キキョウ、イカリソウ、ハブソウ、ペニバナなどを植え込み鑑賞と薬用に供することを考えていくことも必要なことではなかろうか。私たちの祖先が自然のなかで身に付けてきた生活の知恵を再発見し、日常生活の中に取り入れていくことも楽しいものである。

◀ 県内博物館めぐり ▶



陸羽西線清川駅から歩いて約10分、最上川の清流を背にして清川神社と鉄筋コンクリート建の清川八郎記念館がある。清川神社は昭和8年に創建され、記念館は37年没後百年を記念し遺品館として建てられたものである。

明治維新の志士としての清川八郎の名を知らぬ者はないが、その人物と功績を正しく認識してい

————— 清川八郎記念館 —————

る人は案外少ないかも知れない。それは明治新政府が薩長人に占められたこと、また小説や映画がゆがめて世に伝えたせいだと成沢館長は語る。学者としての清川八郎など知られざる面が多い。それだけに維新の研究家の訪問も多いという。

ここには少年時代からの日記や山形県指定文化財の著書27件49点はじめ志士たちの心情を語る遺墨が数多く展示されているが、中でも文久3年彼が江戸で浪士隊を募った名簿に近藤勇、土方利蔵、沖田総司等の名も見えて興味深い。とまれ当館を訪ね清川八郎について余りにも不明であったことを知った。

当記念館は、これまで遺品と維新資料収集・清川八郎文化賞実施・公開展示出版の事業を行ってきたが、このたび事業の恒久化をはかり財団法人組織の準備を計画し、全国的に後援方と呼ばけている。所在地 立川町清川 入場大50、小20円
館長 成沢米三氏

たより

東北地区博物館連絡協議会の開催



激動する社会の中で博物館の果たすべき役割はますます増大しつつある。本会の研究協議会並びに総会は、このような社会的要請に応えるため、今年度は当館を会場として、10月22・23日の両日にわたって開かれた。青森県をはじめ、岩手・秋田・宮城・山形の各館から35名の参加者があり、終始和やかな中にも、各館が日頃直面している問題についての真剣な討議が行なわれた。

第1日は山形県教育長の歓迎のあいさつの後、「ヨーロッパの博物館と日本の博物館」と題する

竹内好美先生の講演があり、先生が実地に調査研究された博物館のうち主として北欧の博物館の発達、展示の特色などを紹介された。

この後、研究協議に移り、今年度の研究テーマ「歴史資料の展示のあり方」にそって、青森県立郷土館学芸員花田勝彦氏・秋田県立博物館準備室学芸主事塩谷順耳氏・致道博物館次長酒井忠一氏より、それぞれの館における歴史資料の展示の実際（秋田県立博物館は構想中のもの）と問題点が提示され、これに若干の質疑応答を行なって第1日の研究協議をおえた。

第2日目は蔵王温泉こまくさ荘を会場として、前日にひきつづき研究協議が行なわれた。上記3館の問題提起の中から、庶民史の観点での展示のあり方・古文書の効果的な展示について・歴史資料と民俗資料の関連などの討議題をえらび、それぞれ意見の交換を行なった。

なお、総会において、本会規約第4条と第5条の1部が改正された。また、新会長には当館館長がえらばれ、来年度会場は青森県立郷土館と決定された。

山形県史研究協議会開かる

10月15・16日の両日、県史研究協議会が当館を会場として開催された。この会は県史編さん室が主催して、県史編さん各部会と市町村史編さん関係者および地方史研究者との研究交流をめざして開かれたものであるが、広く県内各地から参加者があり、熱っぽい研究討議が行なわれた。

また、「史料の保存運動について」・「山形県地域史研究会の結成について」などの協議がなされ、それぞれ準備委員をえらび具体的な運動を展開していくことが決定された。これによって、地方史研究の水準はさらに向上するものと期待される。



開催行事報告

- 山形県民俗学研修会 9月1日
講演 丹野正氏 他に研究発表3名
- 私のコレクション(13回)10月5日～11月15日
押絵展 遊佐町 佐々木富郎氏所蔵
- 霞城植物散歩 9月26日
山形市教委協催による婦人学級研修会
- 社会教育行政講座 9月24日～9月26日
県内社教主事研修で博物館見学
- 山辺町大寺地区子ども会博物館学習会10/30

11・12月行事予定

- 講演会 戸川安章氏 (11月2日)
- 文化の日 特別開館 講演と映画のつどい
講演 奥山春委氏 国立科博前植物部長
- おしば展 — 薬用植物を中心として —

山形県立博物館ニュース 第22号 ©
昭和49年9月15日発行
山形市霞城町1番8号(〒990)
山形県立博物館(TEL32-1111)